
足音は雨の匂い

おとぎうり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足音は雨の匂い

【Zマーク】

Z20150

【作者名】

おとぎわづつ

【あらすじ】

妻が死んだ。正確には元妻だったが一昨日までは妻だった女が死んだ。嘘みたいな土砂降りは事故の起きた日から3日間だけ続いて、4日目には夢だったみたいに空から雨雲は消えていた。

最後の雨の日にそいつは現れた。氣味の悪い、手品師みたいな笑みを浮かべて。

「悪いんだが、少しだけ雨宿りさせてくれないか」

そう言って風祭の前に現れたのは忌々しい雨の匂いをその身体にまとわりつかせた、ずぶ濡れの猫のような瞳の男だった。

雨嫌いの絵描きと彼を訪ねる雨男の短いお話。

だい嫌い

雨が地面に叩きつけられる、ざあああといった攻撃的な音はもう一日前から続いていた。窓の外の景色はもの凄い勢いで落ちる水滴にかき消されてよく見えない。温度差で氷結した水分が、雨の子供みたいに窓を滑り落ちていった。

マシンガンみたいだ、と潜り込んだ掛け布団の中で風祭は思った。マシンガントークという言葉があるのならばマシンガンレインなんて言葉があつたっていいのではないか、とも同時に思つた。実際のマシンガンの音なんて聞いたこともないが、風祭の中のイメージとしては雨と凶器なんて大して変わりはないものだった。もしかしたら雨のほうが怖いのかもしれない。凶器は自分が持てば武器になる。しかし雨は。雨は誰の味方もしないのだ。ただ雲から降ってきて、空を地面を世界を自分を濡らして何事も無く去つてゆく。抵抗のために人類があみ出した術なんて、せいぜい傘と屋根くらいのものだ。勝てるはずが無い。

風祭はざるざるとキングサイズのベットから這い出し、顔をしかめて耳を塞いだ。被つていた布団をとつてしまつたせいにより雨の音がクリアに聞こえるのがたまらなく不愉快だった。だから今は雨をかき消せるような音楽が聞きたくてたまらない。あまり音を大きくしたら隣の住人から注意を受けるかもしれないが、もう今はそんなことどうでもよかつた。

山のようく積まれたCDケースの山に近づき、漁り始める。ヘヴィメタルバンドのCDを一枚見つけ出し、どちらにするかを数秒考えてから、右手に取つたほうの中身をステレオにセットした。再生ボタンを押すと耳に馴染んだ金切り声のヴォーカルが部屋の中に響き渡り、風祭はようやくほつとした気持ちで紅茶を入れにかかつた。キッチンに向かう途中で腕時計を見てみると、あれだけベットに転

がっていたというのに、午後になつてから一時間も経つていなかつた。今日はこれからどうするかとお湯を沸かしながら考える。風祭には予定というものが仕事しかない。その仕事も雨の日にはしないと決めている。従つて、雨の日には風祭は音楽を聴くか紅茶を入れるか、気まぐれに買った本のページをめくる事しかしない。料理すらしないのだ。大体雨の日には紅茶以外を口にする気なんて、これっぽっちも起こらない。どこにも不都合は無い。

淹れ立ての紅茶を飲みながら一昨日のことを考える。雨の降り出した日だ。それはつまり、事故が起きた日から雨雲は消えることなく活動を続けているということだ。何年何ヶ月振りの記録的な豪雨なのだとニュースキャスターが淡々と告げていたのを思い出す。被害の映像が流れた瞬間、ほとんど反射でテレビのスイッチを切つたから、そこから先の天気予報を見れない。

一体いつ止むのだろうとため息をついた。もう一秒だってこの雨の匂いを嗅ぎたくない。

ああ、何だつていつもこんなときこ雨は降るのだ。

ドアベルの鳴る音がした。

ベルの鳴った音がした。風祭は家にインターフォンと言つ物を付けていなかつた。もともと付いていたものをわざわざ業者を呼んで取り外して貰つたのだ。顔を合わせずに入と話す、ということが元々嫌いな男だつたし、そもそも風祭に用のある者なんてほんの僅かしかいなかつた。

それでも、そのほんの僅かの人の為に、インターフォン以外の何か来訪者を知らせる為のものが必要だつた。そこで風祭はどこか遠い国で楽器として用いられている金色の重いハンドベルをドアの前に置くよつとしている。そのきらきらした音が、今鳴つたのだ。

一瞬、風祭はいつもの画商が訪ねてきたのだと思つたが、直ぐに首を横に振つた。あの女はそういうところはよく気のつく奴だつた筈だ。現にここ数年間共に仕事をしてきたが雨の日に仕事の話をしにきたのは一度も無い。そこが気に入つてその画商と契約しているのだ。

ならば一体誰が来た。

宅配便か。いやしかし通販で買い物をした覚えもないし、物を送つてくるような知り合いもいない。ならば新聞の勧誘か。それなら放つておいてもいいかと思つた瞬間一度目のベルが鳴り、しぶしぶ席を立ち上がつた。ああ、面倒臭い。

廊下を歩く度にぺたぺたとした素足特有の、足が床に張り付く音がした。廊下の床は冷たいがスリッパを探す気もない。電気を付けていない玄関は、暗かつた。

「失せろ」

がちゃりとドアを開けて、それだけを言って閉めた。閉めようと、した。が、何故かドアは開いたままの状態から動こうとしない。ぐいぐいとドアノブを引っ張つていると頭上から声がした。若い男の声だった。

顔をあげてみると、そこには背の高い猫のような顔をした男が居た。くるくるとカールした肩程までの黒い髪からぱたぱたと水滴を垂らし、ぐつしょりと濡れた真っ黒のシルクハットを被つたずぶ濡れの男だった。まとわりついでいる甘つたるい、どろりとした匂いから、それが今降つている雨のせいなのだとこいつとは容易に想像できた。

現に、男は傘を持つていなかった。

「顔すら見ずに追い返す事は無いだろ？」

顔は美しく整つていて、およそハンサムと言つていいものだったが、浮かんでいる手品師のような笑みが全てを台無しにしていた。けれどその気味の悪さはきっと風祭にしか分からないものだろう。何故ならその甘つたるい笑い方は雨の匂いにとても良く合っていたからだ。

「少しだけ、雨宿りをしてくれないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015o/>

足音は雨の匂い

2010年10月12日16時12分発行